

新型コロナウイルス騒動を考える

小島秀樹

二月十四日、神奈川の八〇代の女性が国内初の死者として新聞一面のトップ記事を飾った。中国湖北省武漢市から拡まった新型コロナウイルス（“NCV”）による肺炎患者は湖北省全体で二月十二日時点で、感染者四万八千二百六人、死者一千三百十人とされる。神奈川、東京、千葉、和歌山での感染が明らかとなっている。その感染経路はわかっていない。大型クルーズ船では集団感染が起きており、下船が制限されている。テレビ・新聞では毎日日々NCVのニュースで覆われている。ほとんど日本国中がパニックになっている状況に近い。国内感染者は二月十五日時点で三三八人である。各種行事がキャンセルされる中、今夏の東京オリンピックの開催を危ぶむ声さえ聞こえてきている。冷静になって考えて欲しい。中国の感染者致死率は二・七%である。日本は〇・二九%である。つまり毎年冬に起こる風邪の方が致死率は高い。治療法や予防法がないということが心理不安を高めているようである。しかしそもそも風邪やインフルエンザに治療法はない。予防薬がないことも常識ではないか。なのに風邪患者に抗生物質薬を出す医者が日本には多いと前から警告されている。テレビに出てくる感染症専

門家と称する医師達（臨床医ではない）は、『マスクをすることが大切です。人混みの中に入らないで、帰宅した時、手指の先を五分～一〇分しっかり洗って下さい。』とアドバイスする。一八八三年、コレラという感染症の病気が、コレラ菌という細菌によって発症すると発見したのはドイツのコッホである。そして細菌学という専門分野を確立した。当時コレラは致死率の高い伝染病であり、恐れられたが、コレラ菌の発見は、病の正体を発見したと世界からみなされ、コッホやフランスのパスツール（同じく細菌学者）は専門家として世にでることになる。その時、同じバイエルン王国ミュンヘンの二五歳年上で公衆衛生学者ペッテンコーフェルは次のように言って医学者として後輩のコッホに対し、誤りを指摘した。『コッホ君、コレラという病気は、コレラ菌によって作られるのではない。コレラ菌と患者の抵抗力（今の言葉でいう免疫力）、そして環境的要因という三要素のかけ合わせで決まる。菌が体内に入っただけでは必ず発症するということではありません。』と問いかける。しかし世界の流れはコッホ・パスツールの細菌を病気の唯一の原因と捉える方向に進み、一〇〇年以上経った今もコッホ・パスツール医学が世界を支配している。N C V騒動も同じ細菌学の考え方の延長線上に

ある。医学者ではない我々が真剣に感染症の病気の原因を考えるべきである。なぜそう言うかと言うと、専門家ほど既存の学会で認められた理論・公理を疑わないからである。医者に限らないと思う。従って専門家でない我々が疑って正しいと信ずる（その方が腑に落ちる）理論を提示すべきである。私はペッテンコーフェルの指摘は正しいと思う。彼は自分の研究室で数人の弟子の前で然るべき方法で入手したコレラ菌を七四歳の時に飲んでみせた。やはりコレラは発症しなかった。下痢はした。この人体実験が証明したことに準拠して考え行動しようと思う。NCV対策としては免疫力強化法である。(一) 十分な睡眠が第一である。(二) 大食をせず代謝しやすい食事、(三) 血流を活性化する軽い運動（散歩でよい）、(四) ノーマルな排泄につきる。